

76 お別れ

サーツ。雨音が雨戸の外から聞こえてくる。

春雨。遠くに雷の音。

「わ・す・れ・た？」

「そうなんじゃ、忘れてしもてなあ。わしも年を取ったものじゃ。何十年も作り続けてすっかり体に染みついると思うたのが、じつは脳味噌とは関係もない、ただの手癖^{てくせ}じゃったという笑い話よ、ハハハハハ。息子どもにこんなこと言えやせん。わしを隠居させる口実を与えるようなもんじゃからの」

拳^{こぶし}で自らの膝を叩く。

「これほど事態を悪くするとは想像もしておらんのだしな。業界ではわしが息子たち憎しで意地悪をしてると捉える向きもあるそうだが、アホくさ。わしが実利に重きを置く人間であることはおまえも知つての通りじゃ。身内だからといって情実で大事な仕事を任せたりはせん。息子たちを会社に入れたのは、四人とも持って生まれたものを活かせると踏んだからじゃ。なによりの証拠に、俊郎、あいつを引き込むつもりは毛頭ない」

カチーン。オレを引き合いに出すか。

「俊郎は俊郎で別の才能がある。映像の方面では見るべきものがある。問題は怠け癖なまじゃな。楽ができる方にはばかり流れていきよる。誰かがギユツと手綱を締めんと。そういう意味では、あの志乃という娘はいいかもしれん。そんな気がする」

マズい。いま志乃を思い出されるのは。

そろそろ潮時だ。オレはカメラを持つ腕ともう一方の腕を交錯させ、そろそろ終了の合図を送った。志乃は視線で頷うなずいてみせた。

オレたちの考えも知らず、じいちゃんの独白めいた話は続く。

「明日、四人が雁首揃えて来きよるらしい。難儀なことじゃよ。また喧嘩になるかもしれん」

「全てを打ち明ければよろしいじゃありませんか。あの子たちも判わつてくれますよ」

「そうじゃろうか」

「そうですよ」

じいちゃんの顔が初めて和やわらいだ。

なごやかな雰囲気ふんいきが部屋を満たしていく。

なんというすがしさ。

まるで本当のじいちゃんばあちゃんのようなうだ。

志乃は屈み込むと、掛け布団を持ち上げて、じいちゃんに横になるよう促した。

「これで安心して成仏できますわ」

「もう行くのか」

「はい。あなた、お体を労いたわってくださいね」

「うむ」

枕に頭を乗せたじいちゃんは、遠ざかる志乃ばあちゃんを顔だけで見送った。

「ありがとう」

志乃は頭を下げ、来たときと同じように障子を開け閉めすると、廊下に消えた。

オレはじいちゃんの瞼まなこが閉じるのを待つて、走馬灯のスイッチを切った。続けてビデオカメラとレコーダーも止めた。

雨音が少々の音は消してくれる。そのまま畳の上に寝転がると、じいちゃんが深い眠りに落ちるまで待った。

午前一時三十二分。

大きな軒いびきが寝室にこだまする。もう大丈夫だ。荷物一式をリュックに詰め、じいちゃんの足許を迂回し、廊下に出た。

……終わった。

部屋に戻ったオレを、志乃と村木が小さな拍手で迎えてくれた。いろいろ話したいところだが、ひとまず駅前のホテルまで連れて行かねば。志乃も早くメイクを落としたいだろうし。

三人は抜き足差し足で階段を下りて勝手口を抜け、傘を差して庭を横切り、築地塀を越えた。電話で呼んだタクシーが裏道に待機しており、ホテルに戻った時は既に午前二時を回っていた。

一同はビールで祝杯を挙げた。

77 歓談

「冷蔵庫の中、ぎゅうぎゅうにビールが詰まっていますよ。なんかサービスいいですね」

「ウチがこのホテルの株主だからだよ」

「飲むの待ってやー。すぐ落とすからー」

「待ちきれないぞ。急げー」

「ねえねえ、撮影したテープ、持ってきてくれました？」

「もちろん。ジャーン。ここにあるデッキは8ミリビデオも再生できるヤツだから、そのまま突っ込んで」

「ハイ」

「おまたせー」

「主演女優のお帰りだ。化粧、まだ付いてるぞ」

「後は飲みながら拭き取るわ」

「姐さん、監督、ビールです」

「冷えてるねえ」

「プシュツと。んじゃカンパーイ」

「乾杯」

「乾杯でっす」

「……くはーっ。効くねー」

「おつまみある？」

「ありまっす。ピーナツにスルメに」

「ビール二本目ちよーだい」

「早いなあ」

「だってノド、カラカラやねん」

「で、どうでした？ 終わってみて監督としての感想は」

「感想ねえ……一言、怒鳴ってもいいか？」

「お隣さんの迷惑にならない程度で」

「んじゃプチ小声で……こらーっ、クソじじい。作り方忘れたって、どーゆーこっちゃねん」

「こっちゃねーん」

「え、忘れた？」

「つまりな、じいちゃん、噂されたみたいに我が子を谷底に突き落としたんじゃなかったんだよ」

「意味わかりませんよー」

「ばあちゃんの口から教えてやって」

「つまりさー、おじいちゃんは意地悪で “天使のプディング” 作りを止めはったんと違^{ちや}うねん。海外旅行して

戻って来たら、頭の中から綺麗に消えて無くなってたと
ゆー」

「頑固じいちゃん、年齢としには勝てず」

「そうなんですか。じゃ、ばあちゃんを蘇よみがえらせてプリン
作りの再開を促そうという私たちの目論見もくろみは」

「大ハズレ……キミ、なんか説明っばいぞ。飲み足りな
いんじゃない？」

「いただきます」

「ついでにあたしに、もう一本取ってー」

「姐さん、黒ビールありますよ」

「黒がいい、美白のあたしには黒が似合う！」

「よーわからんな」

「で、監督。レシピは無いし記憶にも無いってことにな
ると、これからどうなるんですか？」

「明日、息子たちの前で告白するんだって」

「あれ、頑固なおじいちゃんという話だったのに、折れ
たんですか」

「その辺は幽霊はあちゃんのおかげだよ」

「幽霊なんて言わんとって。怖くて今夜寝られへんか
も」

「いや実際、カメラを覗いてたオレの目には、本物のば
あちゃんが化けて出た……いや蘇ったのかと思うくらい、
真に迫ってたぞ」

「そりゃー姐さんですもん」

「もつと言^ゆうて、もつと言^ゆうて」

「いやそればかりじゃないな。キミの特殊メイクの貢献度も大だよ。じいちゃん、まったく疑わなかったからね。さすがハリウッド仕込みだ」

「恐縮でっす」

「なあ、ビデオテープ観ようや」

「ぜひぜひ、俺その場にいなかったんですから」

「そうだったな。んじゃ再生ボタン押すぞ」

「試写会やね。ドキドキするわー」

78 苦悩

「……………」

「……………」

「……………」

「あ、おじいさんが目を開けた！」

「ここが一番キンチョーした場面やわ」

「そうは見えなかったけどな」

「……………」

「やっぱり台本通りには行かないモンですね」

「そこは、アドリブ・ラヴィーンの異名を持つ、あたしですから」

「アヴリルだろ。あつちは歌手だし意味不明！」

「……………」

「おじいさん、完全に姐ねえさんの世界に飲み込まれてますよ」

「たまたま似てたからやわ。そやなかったら」

「でもビデオに映ってて良かった。見直して映ってなかったら幽霊だつてことに」

「言わんとつてちゅーてるやん。怖いからー」

「……………」

「なんか、いい絵ですね。俺、泣けてきました」

「本当に涙流してるよ。監督冥利に尽きるね」

「このコはいつも無防備やから」

試写会は二十分ほどで終わった。

さすがに志乃も村木も疲れたようで、オレはお暇いとますることにした。昼までに叔父に頼まれた編集を完成させる仕事が残ってるし。

村木は今日の午前中には大阪を発たないといけないという。名残惜しそうな顔を見せたが、また会おうとがちり握手した。

「監督、楽しかったです。また呼んでください」

「うん、きつと」

村木は律儀に欠伸をこらえながら、隣の自室に帰るべ

く、廊下に出ていった。

オレは志乃に向き直り、

「ありがとう。志乃のおかげでうまくいったよ」

と心からの礼を述べた。

しかし志乃の顔色がさつきまでとは違う。うって変わって沈んだ様子をしている。

「どうした？」

「ウン……あたし、忍おばあちゃんになつて、ホンマに良かったんやろか……」

「肝心の『天プリ』再開は夢と消えたからなあ」

「そうやなくてさ」

「じいちゃんを騙だましたことか？」

志乃はこくりと頷うなずいた。

「仕方なかったよ。状況が行き詰まつてたからね。それにばあちゃんが生きてたら、きっと同じことをしたんじゃないかな」

「それやねん」

ぼそりと呟つぶやくとベッドの上に腰を下ろした。

「あたしが東京で役者を続けていくんやったら、再現ビデオ専門しか、道は残されてなかったん。そやけどいくら外見をリアルに再現しても、その人がホンマに抱いた想いみたいなもんはその人にしか判らへんわけやん。いくら想像力を逞たくましくしたって。そやからあたし……」

「今回もやりたくなかった？」

「ううん、そんなことない……でも、後ろめたさがどうしても残るわ」

オレは志乃の肩に手を置いた。

「明日、もう今日だけど村木君を新大阪まで見送るんだろ。そしたら戻って来いよ。ばあちゃんのお墓に案内するよ」

「ああ、絶対絶対よろしく」

午前三時二十分。

雨はすっかり上がり、雲間から月明かりが射している。徒歩で屋敷に辿り着くと軽くシャワーを浴びた後、すぐに机に向かって編集作業を開始した。

志乃の言葉が頭にこびり付いて離れない。類い希な才能を素直に喜べない彼女の苦悩の根深さをようやく理解できた想いがしたからだ。

79 一番の動機

午前四時三十五分。

時折激しい睡魔が襲ってくる。

ひとまず必要なカットはVHSテープからパソコンにキャプチャーし終えた。次はつなぎ作業。そして効果音

や音楽を付ける。残された時間でどこまでやれるやら。

外はまだ暗い。トイレに行ったついでに台所に寄ってコーヒーを沸かした。もう少しすればじいちゃんが起きてくる。今頃はまだばあちゃんとの余韻に浸っているのだろうか、夢の中で。

寒い廊下を奥に向かって目をやる。

『忘れてしまった』。

あの瞬間、足場が崩れていくような思いがした。

志乃が切望していた“天使のプディング”復活計画が脆くも潰えた瞬間だ。心底ガツカリだった。しかし最後まで集中力だけは絶やさぬようにした。

ふと、学生時代に、発表会や運動会を撮影する仕事を受けたことを思い出した。些細な経験ではあったけれど、取り直しの利かないライブ映像を撮るという点でとても勉強になった。

撮影中は何が起るか判らない。徒競走で先頭を走っていた子がいきなり転ける、時間が延びていざカメラを向けたら太陽の光が正面から入ってくる、そんなことはさらにあった。

カメラを構えたら何が起きてても慌てないこと。体で覚えた教訓だ。今回はその経験が活きた。

じいちゃんの『七掛けぐらいが丁度いい』に倣えば、十に三つは上手いかないと覚悟しとけつてところ

か。

でもやっぱり残念だ。志乃には可哀想なことをしたな。
“天使のプディング”を食べさせてやりたかった。

そうだ。食べさせてやりたかったんだ。

口いっぱい頬ばるところを見たかった。

「めっさ美味しいー」を聞きたかった……。

「俊郎、できてるか？」

勘三郎叔父の大きな声に瞼まぶたを開いた。

ボケていた両目の焦点が徐々に合っていく。

見つめる先には時計の表示板。

午前十時三十二分。

ハッとして背筋を伸ばした。知らないうちに、机に突っ伏して寝ていたのだ。扉の向こうから叔父がピンと伸びたヒゲ面の顔を覗かせる。

「もうすぐ全員やつてくる。頼んだぞ」

そう言うтусぐに引っ込んだ。

慌ててパソコン画面を見た。なんとか編集作業は済んでおり、レンダリング作業を施す直前で意識を失ったらしい。ちなみにレンダリングとは、各トラックに別々に配置した撮影カットや特殊効果（フェードイン&アウトなど）を含めて一本のファイルのように一つのファイルへと変換することをいう。

早速メニューを選んで、enterキーを押した。この長さなら十分もかからないだろう。

「おっはよー。トシ、元気ハツラツ？」

今度は志乃の登場だ。ジャケットの下の白いTシャツが、起き抜けの目には眩しい。

「そんなワケないよー。ひたすら眠い」

「そうやと思って、熱ーいコーヒー持ってきたよ」

「お文さんが作ったんだろ？」

「でした。あたしはスイッチ入れただけ」

「まあ、ありがたくいただくよ」

カフェインが体に染みていく。

「村木君はもう帰ったのか？」

「ウン、早い新幹線に乗るっちゅーて。おかげで寝不足。なあなあ、目に隈くまできてへん？」

「うつすらと」

「イヤやー。念入りに塗ったのにー」

冗談だよと笑いながら、パソコンの画面を見たオレは、サアーツと冷たいものが全身駆け巡るのを感じた。

「……か、か、固まってる」

80 最終局面へ

志乃は握った拳でディスプレイの上をコンコンと叩い

た。

「パソコンって固かったらアカンの？ ふだんはボヨンボヨンしてんの？」

「そうじゃない、ほら」

マウスを掴^{つか}んでパッドの上をぐるぐると動かす。画面上のカーソルはぴくりとも動かない。

「レンダリングをスタートした途端、固まったんだ。

あー、今朝の苦労が水の泡か。ツイてない」

「判った。確か英語でフリーズっちゅーんやろ。聞いたことあるでー」

「うれしそうに言うなよ。うーん、再起動か」

恨めしげに画面を見つめながら再起動ボタンを押した。立ち上がりをじっと待つのに耐えられず、志乃に話しかけた。

「じいちゃんには会ったろ。今朝の様子はどんなだった？」

「めっちゃ顔色良かったで。晴れ晴れしてはった。なんかこう生気が漲^{みなぎ}ってるっていう感じ」

それは朗報だ。気分が少し軽くなった。

「志乃ばあちゃん効果だな」

「あらーん、それほどでも」

再起動が終了した。念のため編集ソフトのフォルダを開いてみる。

「あっ」

「今度はナニ？」

「保存してあった」

レンダリング前のファイルを発見したのだ。タイムスタンプつまり最終保存時間は七時四十二分。恐る恐るダブルクリックする。

「あ、あ」

「またー。脅かさんとしてやー」

「良かった。これ最終版だ」

眠りに落ちる直前、なんとか保存だけはしていたらしい。さすがオレ。

その時、階下から大きな怒鳴り声が出た。

「いい加減にせい！」

じいちゃんだ。志乃がオレの顔を見る。

続いて勘次郎叔父らしきトーンの高い声が響いてきた。どうやら話は拗^{こじ}れているようだ。

階段を上がってくる足音がして扉が開いた。勘三郎叔父はほとほと困ったという顔をしている。

「やあ、志乃ちゃんオッス。おい俊郎。そろそろ出番だぞ」

「待って。あと十分^{じゅうふん}、いや十五分」

「そんなに待てんぞ。……困ったなあ。昼飯にはまだ早いし」

そんな会話の合間にも激しいやり取りが聞こえてくる。

「叔父さん、じゃあ三分で降りていくから」

「三分だな。了解！」

言い残すと叔父は階下へ駆け下りていった。

「そんなカップ麺みたいな時間で出来んの？」

「ああ、できる」

オレはすぐさまパソコンの終了メニューを選び、電源を落とした。そして机の横に回って、コンセントから電源プラグを抜いた。

「レンダリングは止めだ。直接パソコンからテレビ画面に映す」

「よお判らへんけど、映画じゃなくて、ライブで見せる演劇みたいなモン？」

「当たらずとも遠からず」

マウスや電源タップなど細かい物は志乃に持たせ、オレは両脇に本体とディスプレイを抱えて、問題児たちの待ち受ける居間へと急いだ。

「なぜそんなに融通が利かん！ 忍が泣くぞ！」

「いちいちお袋を出さないでください！ 情に訴えようなど、卑怯の極^{きわ}みです」

「その言葉、仏壇の前で吐いてみよ」

「いきなり、レシピを忘れたなどと年寄りぶったウソをつくかと思えば、今度は意味不明なことを。^{あきら}諦めて蔵の

鍵を寄越しなさい」

じいちゃん対勘次郎叔父。最終局面だ。

81 お茶の時間

「聞いちゃいられないな」

「どないする？」

オレと志乃は居間の外で、中に入るタイミングを伺っていたが、

「ええい、ここまで来たらヤルしかないよ」

両手が塞がっていたので、閉め切った障子を足で蹴^けつて開いた。思った以上に滑りが良く、障子は大きな音を立てて縦枠に衝突した。

「お邪魔します！」

親子五人の視線が一齐にこちらを振り向いたが、構わずズンズンと畳の上を歩いて行った。

「おい、俊郎君。大事な話をしているんだ。入ってこないでくれ」と勘次郎叔父。

「阿呆！　ここはわしの家じゃ。勝手なことを又力すな！」と勘兵衛じいちゃん。

もはや二人に付ける薬はなさそうだ。勘三郎叔父はしきりに宥めているが効果はない。勘太郎叔父は目を閉じて腕を組んだまま黙って座っている。勘四郎叔父に至っ

ではどちらの態度を取ることもできず、ひたすらおろするばかりだ。

彼らのことは気にせず、運んできたパソコンを部屋の隅に置くと、淡々と組み立て始めた。

背中に勘次郎叔父の視線が痛いほど突き刺さる。

と、続いてやはりタイミングを見計らっていたのか、お文さんが駆け込んできた。

「今日は美味しい紅茶が入っています。このあたりでご休憩されてはいかがでしょうか？」

まるで学校のガラスを誤って割ってしまい、意を決して職員室に報告に來た生徒のように、直立不動の姿勢で伺いを立てている。

「そうだな。いただきましようか」

勘太郎叔父が瞼を開き、ドスの利いた声でそれに答えた。

勘太郎叔父の一声に、部屋に充滿していた緊迫感がいくぶん和^{やわ}らいだ。兄弟のうち一番端っこに座っていた勘四郎叔父がフラリと立ち上がり近づいてきた。

「何やってるの？ 手伝おうか」

「すみません、それじゃ洋間にあるテレビを運んでもらえますか」

「いいとも」

勘四郎叔父の丸めた背中が喜び勇んで部屋を出ていく。

よつぽど居心地が悪かったんだな。

入れ代わりにお文さんがティーカップとポットを盆に載せてやってきた。

志乃は叔父たち一人一人に挨拶して回っている。勘次郎叔父はそつぽを向いたままだが、意外にも勘太郎叔父は細い目を見開いて「本当によく似てますよ」とうれしそうに言葉を交わしている。

やがて、多々良さんと勘四郎叔父が大型液晶テレビを運んできてくれた。オレはパソコン側の映像出力端子につないだケーブルをテレビの入力に差し込んだ。

「えー、おまたせしました。ただいまからお宝映像の上映を始めたいと思います。と言いましても高々二十分程度の長さです。どうぞ紅茶を召し上がりながら、ごゆるりのご鑑賞ください」

オレの口上に勘三郎叔父だけが拍手した。

「それでは」

間髪入れずパソコンの編集ソフトのプレビューボタンを押す。砂嵐状態だったテレビ画面が暗転し、そこに文字が浮かび上がった。

“おまけ”。

「おいおい、いきなりおまけかよ」と勘三郎叔父がお約束の茶々を入れてくれる。

画面に驚愕の表情をした勘次郎叔父のどアップが登場

した。もちろん法要の際に撮影したカットだ。当人は渋面だが、他の人々はクスクス笑いを見せた。しかし続いて勘三郎叔父が「うわーっ」の声と共にテーブルの角に頭をぶつける場面が登場すると、皆遠慮せずに大爆笑した。

“平成十年”。

テロップが出る。時間を遡^{さかのぼ}っていく趣向なのだ。

82 遡行

画面に映ったのは一家勢揃いの映像。頃は正月。ばあちゃんのまわりを息子や孫たちが囲んでいる。まだ数年前の映像だから、お宝とは言えないが。

「フフフ、この頃の勘三郎のヒゲはむさ苦しかったな。

お袋が困った顔してたぞ」と勘太郎叔父。

確かに無人島帰りのように顔の下半分が真っ黒。

勘三郎叔父が苦笑する。

その後“平成元年” “昭和六十年”と矢継ぎ早^{やっば}に遡^{さかのぼ}っていき、そのたびに叔父たちから笑い声や懐かしがる声が起こる。

予想外だった。こんなにウケるとは。最初は、ひよつとすると「邪魔だ」とすぐに追い払われるのではと心配していたのだが。

蛸たこのように怒りで真っ赤な顔だったじいちゃんてさえ画面に見入っている。あくまで無視しているのは勘次郎叔父たった一人。

“昭和五十年”。ばあちゃんの誕生日に蔵の中で撮影されたものだ。

「へえ。親父こんなの撮ってたのか。隅におけないねえ」と勘三郎叔父。

「取っ替え引っ替え、金髪撮りまくってるお前と違って、わしは一途じゃからの」とじいちゃん。

「こりゃ一本とられた」で大笑い。

始まって五分を過ぎる頃には、さきほどの険悪な空気がすっかり薄らいでいた。勘三郎叔父が自ら道化役を買って出たせいもある。

一番後ろで座って観ていたオレの手を、突然、志乃が握ってきたので思わずドキリとした。

「時間を逆にするのって結構面白いんやね。監督さんスゴい発想やん。さっすが天才！」

「ハハハ、ありがと」

時間軸を逆行そっこうしながら登場人物の行動を結果から原因へとなぞっていく。日韓合作映画『ペパーミント・キャンディー』が頭をかすめたのかもしれない。重たい映画だったが非常に感銘を受けた作品だ。オレのお薦め。

振り返ればこれまでたくさんの映画を観てきた。どの

作品も大なり小なりオレの血となり肉となってきた。積極的に映像に携わっていこうとしているこれからの人生、きっとそれらがオレを助けてくれることだろう。

「コウちゃんも帰りしなに言うてたよ。トシは光るものを持ってるって」

「村木君が？ 光栄だな」

詳しく聞こうとしたその時、紅茶茶碗をガチャンと置く音がしたと思うと、勘次郎叔父がガバツと立ち上がった。全身が小刻みに震えている。

「も、もうたくさんです。現状から目を背けて夢や過去の栄光しか見ていないあんたたちには付き合いきれん！

私は何も嫌がらせで悪態をついているのではない。驚村製菓の行く末を案じているからこそ苦言を呈している。なのに……親父、これ以上もう何も申しますまい。こうなったら法に訴えてでも“天使のプディング”のレシピを奪ってみせますからね。覚悟しててください！」

一息に言うと、喉が渴いたのだろう、カップに残っていた紅茶を飲み干した。あたかも体内の怒りに火がついたように瞳が炯々と燃えている。

残念。

最後の牙城である勘次郎叔父だけは攻略できなかったか。

失礼する、と吐き捨てるように言うと、叔父は部屋か

ら出ていこうとした。

「ちよつと待て」

じいちゃんが片手を挙げて制した。その声にはただならぬ響きが含まれていた。笑っていた時とも喧嘩していた時とも異なる響きが。

勘次郎叔父も障子を開けたところで足を止め、不審な面持ちでこちらを見ている。

「ちよつと待て、俊郎、この映像は何だ？」

待てとは、オレに向けられた言葉だったのか。

画面右下には「撮影年月日不詳」の表示。

「これがどうかした？」

83 祖父狂乱

「どうしたもこうしたも……こんなフィルムは見せてもろうたことない……ぞ」

じいちゃんは座布団から腰を浮かすと、片手で側頭部を抱えながら、もう一方の手は宙を掴むような仕草をした。それでも目は画面に釘付けのままだ。何か気に障るものでも映っていたのか。

「そりゃ見たことないかもね。蔵の中でずいぶん長いこと埃をかぶっていたから」

じいちゃんはウウと唸ると、畳に目を落とした。どう

も様子が変だ。

「かなり古いフィルムだが、映ってる子供らは誰なんだ？」

勘三郎叔父がオレを振り返って訊ねた。

「じいちゃんとはあちやんだよ」

オレの返事を聞いた叔父たちの反応は見物^{みもの}だった。彼らは座布団から尻を離すと、齧^{かじ}り付かんばかりにテレビの前に集まった。勘次郎叔父でさえ開けた障子から手を離し、伸び上がって兄弟たちの頭越しに画面を覗き込んでいる。多々良さんとお文さんは互いに顔を見合わせている。

「ハハハ、このひよろつとしたガキが親父か？」

勘三郎叔父が歓声を上げる。

「この女の子がお袋……」

勘四郎叔父は愛^{いと}おしむような視線を幼い少女に注いでいる。

「作って良かったな。苦勞が報われたやん」

隣で志乃が笑った。その時オレたちはまだ手を握りあったままだったことに気づいた。それとなく手を離すと、できるだけ自然な素振りで両手を自分の頭の後ろにもっていった。

「素材の持つ力にオンブってところだな」

「でも選んだのはあんたやん」

そこまで善意に解釈しなくても……とは言わなかった。

「……そうか！」

じいちゃんは突然、大音声だいいおんじょうを張り上げ、バネ仕掛けの人形のように勢いよく立ち上がった。視線の先はテレビ画面ではなく、外を向いている。

「ふ、ふは、ふはははは」

笑い出したじゃないか。気でも狂ったか？

誰もがそう思った時、じいちゃんは動いた。

「どけどけ」と息子たちを蹴散らすと、庭に面した障子まで歩いて行って、両手で押し開いた。

春の日差しが居間の畳に差し込んでくる。快晴。

「待っておれ、忍う！」

そう叫ぶと着流しの裾を風になびかせ、素足のままひらりと庭に降り立ち、池に向かって走り出した。

「親父！」

「どうしたんですか！」

残された叔父たちが口々に叫ぶが、じいちゃんは聞く耳を持たず、砂埃を蹴立てながら一散に駆けていく。

「追いかけるんだ！」

勘太郎叔父の一声が、みなを一齐に立ち上がらせ、玄関へと駆り立てた。

ダメだ。じいちゃんがとんでも無いことをやらかすとしたら、靴を履いてる暇なんかない。

オレは靴下を脱ぎ、外廊下から庭の砂地の上に飛び降りた。砂粒がヤワな足の裏に食い込む。

「トシ！」志乃が叫ぶ。

「スマンが、玄関からオレの靴を頼む」

言い残すと、じいちゃんの後を追った。

庭は至るところに芝生が植えられている。できるだけその上を走るように心がけて急いだ。

じいちゃんは池に掛かる石橋を渡り終え、そのまま池沿いに進んでいく。死にものぐるいで駆ける姿は、黒澤映画『八月の狂詩曲』^{ラフソデー}の感動的なラストシーンを思い出させた。

オレの足がようやく石橋に達した時、目に飛び込んできた光景に、肌が粟立^{あわだ}つのを覚えた。じいちゃんは三年前ばあちゃんが倒れていた場所に、同じ格好で仰向けに倒れていたのだ。

84 謎の行動

「じいちゃん！」

大の字になって地面に横たわったじいちゃん。

まさか忍ばあちゃん恋しさに後追い自殺か？

だとしたら、昨夜のオレたちがやったことは、じいちゃんを追いつめたことになりはしないか？

そんなバカな！ いや、でも……。

いろんな想いが千々に乱れ、じいちゃんかがの横に屈み込んだオレは言葉もなく、ただじつと顔を見つめるだけだった。

じいちゃんは目を閉じたまま、荒い息で胸を上下させていた。良かった。まだ生きてる。

「死んどらんぞ」

「わ、びつくりした。なんだよ、驚かすことばかりしてさ。はた迷惑もいいとこだよ」

「知ったこっちゃないわい。……それよりな」

じいちゃんは目を開けると、オレの顔をジロツと見つめた。

「これからやることには驚くなよ」

そう言ったかと思うと、七十を越えた老人とは思えない俊敏さで身を起こし、池の中に両手を広げたままダイビングした。

「じいちゃん！」

ドボン。跳ね上がった水が降りかかってくる。

オレは顔にかかった水を払うこともせず、石垣から身を乗り出した。

じいちゃんはすぐに浮かんできた。

「手を出して！」

しかし濡れネズミのじいちゃんは、水の冷たさも気に

ならない様子で、目ばかりキョロキョロさせている。

「早く手を！」

「うるさい。それより何かその辺に、砂を穿^{ほじく}れるようなモノはないか？」

言われるままに周囲を見回すと、握るのに手頃な木きれが落ちていた。

「これでいいかい？」

「グッドだ」

受け取るとじいちゃんは水の上に浮かんだまま、石垣の間を木ぎれで掘り始めた。

石垣はほとんど垂直に積み重なっているので、オレの方からはよほど身を乗り出さないと、何を掘っているのか、よく判らない。

「親父！」

ようやく叔父たちが到着した。勘三郎、勘四郎、勘太郎の順。勘次郎叔父もふて腐れた顔ながら、しつかり付いてきている。

「旦那様、何をなさつておいでです。お体に障^{さわ}りますから早くお上がりください」

手を出す多々良さんやお文さんにも、

「ウルサイ！」

と一喝^{いっかつ}、ひたすら黙々と掘り続けている。

老体とはいえなかなか器用に浮かんでいる。さすがは

若い頃いろんなスポーツで鍛えただけある。

ガッガッガッガッ。

「ここじゃない」

ガッガッガッガッ。

「こことも違う」

じいちゃんの周囲の水はすっかり砂色に染まってしまった。鯉たちが遠くで非難がましい視線を送っている。

「おじいちゃんは何してはんの？」

志乃がオレの前に持ってきた靴を置くと、横に座って首を伸ばした。

「見えないだろ？ オレにもじいちゃんの考えてることが判らん」

「手伝^{てつど}うてあげたら？」

「……まったく人騒がせな年寄りだ」

上着を脱いで志乃に渡すと、オレは石垣を伝いながら冷たい水に入っていた。

「コラ、邪魔するな」

「手伝うんだから、ガタガタ言うなつて」
負けじと口を真一文字にして睨^{にら}み返す。

「……頑固じゃのお。誰に似たんじゃ」

水に胸まで浸かったじいちゃんは諦めて、同じく水に浸かったオレに木ぎれを寄越した。

「おそらくこの辺じゃないかと思う」

じいちゃんの指差すあたりに木ぎれを突っ込んでみる。それは石垣を構成する石と石の隙間だった。どの隙間も、吹き込んだ砂が溜まっていたり、苔や雑草が生えていたりしている。

「探し物はいったい何なの？」

「それは言えん」

「言ってくれなきゃ探しようがないじゃないか」

「あればすぐに判る」

オレは引き受けた手前、不承不承ながら掘り返す作業を始めた。水の上に出ている石垣の幅はおよそ三十センチ。隙間は無数にある。

見つめる誰もが言葉を発しない。

ザクザクと音だけが流れていく。

鯉たちもだんだん慣れてきたらしい。オレの背中を突つついてくる。それとも早く終わらせて出て行けとせつついてるのかな。

「じいちゃんの水から出たらどう？」

「気にするな」

多々良さんが、もう二十分が過ぎましたよと教えてくれた。そろそろ寒さに耐えられなくなってきた。なんで

この年寄りは平気なんだ？

カサツ。

木ぎれの先に何か当たった。注意して見ると、透明なビニール袋みたいなものが見える。

掴んで取り出そうと思った瞬間、横から伸びた手にドンと突き飛ばされ、オレは背中から水の中に沈み込んだ。

「ゲホツゲホツ、ナニすんだよ！」

水を吐きながら浮き上がったオレの前で、じいちゃんは紙とペンらしき物の入ったビニール袋を自分の前にかざし、悪魔の笑いを浮かべている。

「でかしたぞ！ 俊郎」

「それは？」

「じゃあな」

じいちゃんはオレの問いかけには答えず、袋を口にくわえると池の反対側に向かって泳ぎ始めた。

「おいこら、ジジイ！」

頭に来た。いくらなんでも酷^{ひど}すぎる。

じいちゃんは途中で泳ぎにくくなったのか、着流しを脱ぎ、そのまま対岸へと進んでいく。その速いことつたらない。

叔父たちが目に見えない金縛りから解放されて、再び追いつめた頃には、すでにじいちゃんは対岸に上がっていた。

「わっははははは」

フンドシ一枚で高らかに笑っている。その声には聞く者の氣勢を削ぐ力がこもっていた。

「勘次郎よ」

呼ばれた叔父が息を飲む。

「喜べ。〴〵天使のプディング〴〵を再開させるぞ」

「……本当ですか？」

「ウソなど言わん。来月一日から出荷を再開する。お得意さまにそう伝えい」

「……それはどうも……ありがとうございます」

さんざん楯突いた叔父も、そう言うしかない。目の色はあくまで疑っていたが。

「さあて、そろそろ昼飯時じゃのう。お文、こやつらにウマいものを食わせてやってくれ。わしは工場に行くから後で届けてくれ」

そう言うといじちゃん、くるりと向きを変え、スタスタ屋敷に戻っていった。フンドシ姿のまま。

残された者たちは全員、口を開けっぱなしで見送るばかりだった。オレは池に浸かったまんまで。

じいちゃんへの昼飯は、志乃が志願して持っていた。もちろんオレも付いていく。

「おじいちゃん、お昼ご飯ですよー」

じいちゃん専用の厨房に足を踏み入れるのは久しぶりだ。どこもかしこもピツカピカ。使っていない時も毎日磨いていたに違いない。

86 墓前にて

「やあ志乃さんが持つてきてくれたのか。本来ならここはわし以外入室禁止なんじゃが、志乃さんならいいぞ」
「オレもいいだろ」

「なんじゃ付いてきたのか。しょうがないのう」
このじいさん、異常にタフだ。オレなんてまた風呂に飛び込んで暖をとったというのに。

昼食はオレと志乃の分も持つてきたので、三人並んでの昼食会となった。

「なあじいちゃん。そろそろ教えてくれよ」

「何をじゃ？」

「さっきのビニール袋には、レシピが入ってたんだろ
う？」

「そうじゃ」

「エーッ、そうやったん？」

「そうだよ。だから再開を宣言することができたのさ。
オレの助けを借りてね」

「判った判った」と味噌汁に口を付ける。「この厨房は

衛生第一じゃから、食事を済ませたら外で話さんか。実はこれから忍の墓参りに行こうと思うておる」

「あ、丁度いいー。あたしらも連れてって」

鷺村家の菩提寺は、屋敷を裏に回って十五分ほど歩いた高台にある。

ばあちゃんの墓を清め、三人はそれぞれの思いを抱きながら、両手を合わせた。

春。生きとし生けるものが萌えあがる季節。

俳句を詠むばあちゃんが特に好きな季節だった。

「わしと忍は、物心^{ものごころ}ついた時から一緒におった。互いに異性と意識する前から、仲のよい遊び友達じゃった。近所に年齢の近い友達がおらんかったこともあって、わしらは常に一緒だった。忍の家は狭かったこともあって、ほとんどはうちの屋敷か庭で逢^あうとったな。

忍は想像力の豊かな娘で、遊び方のほとんどは忍が考え出した。時間は無限にあっだし、庭は二人にとってはワンダーランドじゃった」

じいちゃんは遠い目で遙かな山々を眺めた。

「どちらかが外出で遅くなったり、泊まり掛けで不在の日などは、手紙を書いて二人で示し合わせた場所に置いておく習慣もできた。忍はそういう場所を見つける天才での。樹木のウロや蔵の壁に走るヒビの間やら」

「そのひとつが、池をめぐる石垣の間だったと」

「そうじゃ。誰にも教えてはいけない秘密の通信手段、通信場所だったんじゃ。なのにハハハ、わしの親父にはしつかり撮影されとったんじゃな」

「じいちゃん達には、こつそり撮ったことを教えなかったんだね」

「ああ。きつと怒ると思っただんじやろう」

「それがあのフィルムやったんやねえ」

志乃が深いため息をついた。

「わしがどれだけ驚いたか想像もつくまい。通信場所のことなぞ、この六十年、一度も思い出したことはない。忍とも話したことはなかった。半世紀を超えて、あのビデオを見せられた時、わしはこれこそ忍の思し召おぼめしだと思っただんじや」

じいちゃんは一とつ咳払いした。

「ぶちまけて言うが、じつは昨夜、夢に忍が現れての。わしらは久しぶりに話し合あうたのじゃよ」

オレは志乃と目線を交わした。

「短い間じゃったが、わしらは良い時間を過ごすことができた。苦労をかけた詫わび言ごも伝えられたしのう。忍は三年前の元気な時のまま、わしに微笑んでくれよった」
志乃が白い雲を見上げる。

「じゃから忍には告白したんじや。レシピの記憶を無く

してしもうたと。だからきつとあのフィルムをわしに届けてくれたんじゃないろう。あそこに置いたとききましたよと。忍は六十年も昔の通信方法を忘れてはおらなんだんじゃない」

志乃が目頭を押さえながら、はな涙をすすった。

87 手紙

じいちゃんふとしろは懐からビニール袋を取り出した。そして中の紙切れを引つ張り出すと、オレたちの前に拡げて見せた。

「何なん、この数字？」と志乃。

「レシピじゃよ。『天使のプディング』を作るため、各種原材料や香辛料などの分量や調合の割合を書いてある」

じいちゃんふとしろはもう一枚、入っていた紙を見せた。

「これってばあちゃんの字じゃないか」とオレ。

そこにはこう走り書きされていた。

あなたへ。

私はあなたが『天使のプディング』の作り方をお忘れになったことに気づいておりました。だから私の一存で、裏道を通してレシピを持ち出させていただきました。

こつそりお見せしてまた元の場所に戻しておくつもりでしたが、できなくなりました。おそらく私はこの場所では息を引き取るでしょう。最期の力を振り絞ってこれを書き、ある場所に置きます。私が持ったまま見つかつては何かと不都合があるでしょうし。どうか見つけてください。いますように。あなたが私の分まで長生きされますよう祈っております。息子たちのこと、よろしくお願いします。あなたと共に歩んだ六十余年、本当に楽しかった。

ありがとう。忍

「三年前のあの日、忍は手紙を書き終わると、レシピに同封して、石垣から身を乗り出してあの場所に入れたんじゃない。今にも雨が降ってきそうな天気じゃったから奥の方に突っ込んだんじゃない。おかげで雨露に濡れたり流されることはなかったが、見つかるのに三年もかかってしもうた……」

じいちゃんは涙する志乃の肩に手を置いた。

「ありがとう。忍のために泣いてくれて。これで忍もようやく成仏できるじゃろうて」

立ち去りかけたじいちゃんの足が、振り向いた。

「志乃さん、明日にでもまたいらっしやい。本物の“天使のプディング”を食べさせてあげよう」

「あ……ありがとうございます」

後に残ったオレと志乃は、小高い丘の上から鷺村邸を見おろした。屋敷や蔵が一望できる。

「これで一件落着だな」

「良かったね、解決して」

志乃の目はまだ涙でいっぱいだ。オレは黙ってハンカチを差し出した。

「ありがとう……ああ、なんか力が抜けてもた」

「ホントにな、二十四時間前には、こんな展開が待ってるなんて想像もしなかった」

「あんたの演出のおかげやわー」

「違うな。志乃の“なりきり”演技の賜だよ。たまものじいちゃんあんなに満足そうだったじゃないか」

志乃の顔が翳^{かげ}った。オレは言葉を足した。

「もしかして再現したことを後悔してるんじゃないか？
言っとくけど志乃の活躍はじいちゃんを元気にしただけじゃなく、鷺村の危機をも救ったんだぞ。プリンも再開されるし、みんなが幸せになったんだ。ばあちゃんだって喜んでるよ」

「ウン、それやったらエエかも」

「エエに決まってるって。それにこれ、ビジネスになるかもしれないぞ。人を幸せにする再現ビデオを作ります。

“再現屋”なんて名前付けてさ」

「さいげんやー？　なんかダツサー」

「好きに言ってくれ。さあこれから梅田か難波に繰り出して打ち上げやろう。オレがおごるから」

「なあ、トシ、ひとつ質問さして」

「何だよ、あらたまって」

「トシのお母さんって、あたしに似てる？」

「似てない。お袋はじいちゃん似だ」

「良かったー。アハハ」

「どういうこっちゃ」

《再現屋、産声を上げる　完》